様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：４７１１０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５００７１８

研究課題名（和文）身体的リテラシー形成と生活スタイルに関する国際比較研究

研究課題名（英文）International comparoson research of the reationship between physical literacy and life style

研究代表者
鐘ケ江　淳一（KANEGAE, Junichi）

近畿大学九州短期大学・保育科・教授

研究者番号：９０１８５９１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本、韓国および台湾の児童生徒を対象として、生活スタイル、学習到達度に関する国際比較調査を試みた。組織的スポーツ活動経験や体育授業の学びの履歴が身体的リテラシーの獲得・形成に影響を及ぼしていることが示唆された。
　さらに、途上国のスポーツ・リテラシー教育の制度設計を視野に入れ、カンボジア北部において体力・運動能力テストなどの探索的な視察調査を実施した結果、現地の教育欲求・必要を掘り起こしていくことの必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We conducted an interational comparative survey regarding student's lifestyle,learning product,and learnig career in PE classes.As the result, we were able to find next actual fact, The relation was observed between physical reteracy and learning career, besides that club activities in school.
The following results of our research for the developing country were obtains: (1) there is likely no effect to propose Japanese PE instruction system, so-called developed countries in PE, to Cambodia. (2) it is necessary to examine the possibilities to make developing countries's PE well-matching with the present states of affairs in school environment, further the daily life reality of children and teachers.

研究分野：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：スポーツ・リテラシー　身体的リテラシー　生活スタイル　運動スキル　体力・運動能力

１．研究開始当初の背景

世界各国で生活様式の急激な変化のもと、子ども・青年の体力・運動能力そして社会的交際能力の低下など、「スポーツ・リテラシーの土台の崩れ」の様相を呈しているが、そこでは、とりわけ、運動スキルを獲得していく上での「育ちそびれ」「学習遅滞」が「スポーツ享受における平等性」をめぐる事態をいっそう深刻にしているように思われる。わが国でも、中央教育審議会(2002)が指摘した「二極化傾向」を契機として、2011 年度より完全実施された小学校学習指導要領では、「体つくり運動」を低学年から実施し、６学年すべての学年で指導され、そこでは、「多様な動きをつくる運動（遊び）」が重要な内容として盛り込まれている。また、イギリスにおいても、身体的リテラシー(Physical Literacy)という概念が 1990 年代後半に提起され、質の高い体育実践の創造に向けた論議が開始されている。そこでは、「身体的リテラシーの確立と養成は体育教育のレーゾンテールであり、また、このカリキュラムの領域における質の高い課業の実現にとっても決定的である」とされている。スポーツ・リテラシーの中で「身体」「運動スキル」の問題をどう扱うのか、がきわめて大きな検討課題となっているものといえよう。このことは、スポーツ・リテラシー形成の過程で、様々な動きの経験や学習が、その後の子どもの学びや育ちにとって重要な役割を果たしていることを示している。したがって、「基礎的運動スキルを獲得する時期」と言われる就学前から小学校中学年期にどのような運動をどのように身につけるのか、また、基本的な運動動作が遊びをはじめとした生活スタイルの中にいかに位置づいているのかを考えることは、近年の子どもの身体的な問題を考える場合に有意義な示唆を含むと考える。子どもの体力・運動能力の低下をもたらしていると考えられる「生活世界の変容」については、各種の調査研究によって子どもの育ちや学びの質や量に関する様々な変化が指摘されている。しかし、そのほとんどは、体力。運動能力調査や質問紙調査による量的データに依存したものである。特に、就学前段階と小学校中学年段階の子どもの実態に焦点を絞り、量的研究（質問紙調査など）と質的研究（聞き取り調査など）を併用した体系的な調査研究は十分に蓄積されてこなかった現状がある。

２。研究の目的

そこで本研究では、以下の 3 つの課題を設定した。

①「身体的リテラシー」概念の外延と内包、その構造的把握のための予備的考察を試みること。

②調査対象国・地域の就学前教育・初等教育におけるスポーツ教育の内実（保育・授業とカリキュラム）について、「身体的リテラシー」という視点から精密な実態把握をする。

③それらの結果の比較分析をつうじて、「身体的リテラシー」という視点から「国境を超えて共通に存在する教育課題」と「それぞれの国と地域に固有の教育課題」とを識別する。

なお、本研究では、先行研究および本研究に至る準備状況を考慮して、アジア地域から日本、韓国、台湾の３つの国・地域を比較調査の対象とした。

３．研究の方法

（１）身体的リテラシーの概念に関する文献研究

Association for Physical Education(afPE)、Physical Education Initial Teacher Training & Education などの学会 Web サイトに掲載されている身体的リテラシー概念、さらに、以下のような Whitehead、M の著書を分析の対象とした。

①Margaret Whitehead(2001),The Concept of Physical Literacy, British Journal of Teaching Physical education.

② Margaret Whitehead(2005),Physical Literacy：A Developing Concept, British Philosophy of Sport Association.

③Whitehead ME, Murdoch E, Physical Literacy and Physical Education: Conceptual Mapping, PE Matters Summer 2006.

（２）質問紙調査による比較研究の分析的枠組み

本研究では、以下のような分析枠組みのもとに研究を進めた。

１）垂直比較：小学校、中学校、高校の児童・生徒を対象に、日常生活の中のスポーツ活動の実態、さらに、学校体育カリキュラムの実態を把握するとともに、彼らの運動有能感やスポーツ価値意識・スポーツ観が形成されるのかを明らかにする。

２）水平比較：社会・文化的差異や教育システムの違いによって、国・地域間で児童・生徒の運動有能感やスポーツ価値意識・スポーツ観にどのような差異または共通性が認められるのかを明らかにする。

（３）途上国におけるスポーツ・リテラシー教育の制度設計関する基礎的研究

途上国に対する支援方略を検討するために、観察、インタビュー、質問紙調査を実施した。観察は、2013 年 1 月、11 月、2014 年 11 月、2015 年 3 月に実施したチョンカル小学校の運動会場面で行われた。学校関係者へのインタビューは、事前協議や運動会の間に非公式に行われた。さらに、運動会に参加した子ども、教師を対象として運動会の感想に関するアンケートを実施した。

４．研究成果

１）「身体的リテラシー」概念に関する予備的考察

イギリスにおいて展開されている身体的

リテラシー(Physical Literacy)概念をめぐる論議について、特に Margaret Whitehead による言説に焦点化し、（１）身体的リテラシー概念の定義、（２）身体的リテラシーの獲得と維持における６つのステージ、（３）身体的リテラシーと体育教育について考察を試みた。

（１）身体的リテラシー概念の定義

Whitehead、M によれば、身体的リテラシーは生涯を通じて身体活動を維持するための動機づけ、自信、身体的資質(competence)、知識および理解に関わって、以下のように示されている。

①「生活の質の向上に重要な貢献をするように私たちの運動の可能性(movement potential)を利用する能力(ability)と動機図付け」である。

②私たちは、人間である限り、すべてこの可能性を発揮することができるが、それの具現の仕方は私たちが生きている文化や所有している運動の能力(movement capacities)によって変わってくる。

③身体的に教養のある(physically literate)人は、身体的な意味での様々な課題状況下にあっても、バランスの取れた、無駄のない、そして自信を持って運動できる。

④知性と想像力を働かせながら身体的環境の全局面を読み取る洞察力をもっており、運動の要求や起こりうるべき可能性を予測し、それらに適切に反応できる。

⑤世界の中でも自分を見失うことのできない自己意識を十分に確立している。それは、自己を表現する形で環境と相互作用し、同時に、肯定的な自尊心や自信をもたらす。

⑥自己の所有する能力(capacities)への感受性や意識が、ノンバーバルコミュニケーションを通して流暢に自己を表現したり、また他者との受容的で感情のこもった相互作用を可能にする。

⑦自身の運動パフォーマンスに対して、何が効果的な影響を及ぼすのか、その特質を見出しそれを明確にする能力を持っており、また、エクササイズ・睡眠・栄養といった健康維持のための基本的な点に関する原理原則を理解している。

（２）身体的リテラシーの獲得と維持における６つのステージ

Whitehead、M は、身体的リテラシーの獲得と維持に関わって、①就学前期、②初等教育期、③中等教育期、④新卒期、⑤成人期、⑥老年期の６つのステージに区分する。さらに、以下のような諸点を強調している。

①身体的リテラシーの確立において体育教育が欠くことのできない特別の機会を提供していること。

②個々人の生涯にわたる身体的リテラシーの確立と維持に際し、広範な人々が関与し、それぞれの役割を演じていること。

③身体的リテラシーの発達と維持の全ステージで、身体活動の環境では、すべての重要な他者によって、励まし、迎え入れ、支えるように振る舞われることが何より重要であること。

（３）身体的リテラシーと体育教育

身体的リテラシーの発達と維持は、体育教育にとって基本的な目標であること、さらに、身体的リテラシーは生涯にわたって欠くことのできない個人的な特質であるのに対して、体育教育は義務教育期間の学校を基礎にした経験を記述するものとして両者の関連を捉えている。身体的リテラシーが確立される上で、子ども・青年が体育教育において適切に計画され、構造化され、管理された経験を持つことが決定的であることが強調されている。さらに、学校期の、ある意味危機的で成長途上の時期においては体育教育の中で行われるワークは、すべての青年が自らの身体的リテラシーを促進し、それゆえ彼らの身体活動領域における可能性を高める上で持てるほとんど唯一の機会とされる。また、才能のある人に対しては出発点を提供し、有能な身体を持つ人にとってのしっかりとした基礎を提供し、また特別なニーズを持つ生徒たちにとって真に大切な経験を提供するものと捉え、権利としての身体的リテラシーを強調する。

（４）体育教育の革新の方向性

①人間的な本性として所有しているポテンシャルを個別性と文脈性への配慮の中で実現させるという方向性

②主体による運動への能動的・自発的な参加を励ますことで実現を目指す。

③体育教師の特別な役割を承認するとともに、多くの他者が関与し共同することの必要性を強調

④「すべての○○」という時に、性や年齢にくわえ、身体的弱者、特別なニーズを持つ者も含めて構想する。

２）身体的リテラシーの獲得・形成に関する基礎的研究

（１）学習到達度調査および学びの履歴調査による検討

韓国、台湾において質問紙調査（学びの履歴、運動有能感など）を実施した。日本の調査結果と比較検討した結果、身体的リテラシーの視点から以下のような結果が得られた。

①運動技能に関する「学習成果」得点、「身体的有能さの認知」因子得点の男女差が小学生、中学生段階よりも高校段階で拡大すること、②女子の教科に関する「有用さの認知」得点が学校階梯があがるにつれて低くなること、が特徴的であった。この結果、身体的リテラシーに関する学習成果を感得できないために授業に対する愛好的態度や有用さの認知度を下げ、さらに消極的な学習への構えをとらせていることが各国・地域に共通した課題として析出された。

（２）組織的スポーツ活動経験が身体的リテラシーに及ぼす影響

学校体育における「学びの履歴」や学校外

での組織的スポーツ活動経験（スポーツ少年団、スポーツクラブ、運動部活動など）は、個々人のスポーツ観の形成に大きく影響を及ぼしているものと推察される。そこで、大学生を対象とした「スポーツ価値意識尺度」を開発した。「スポーツ価値意識尺度」は「社会的有用性」「陶冶性」「日常的有用性」の３因子で構成される。また、「スポーツ像」の分析カテゴリーとして「勝利志向」「鍛錬・精神主義」「伝統」「努力志向」「自己志向」「ジェンダー」「レク志向」「協力・共同」「規範意識」「科学主義」「環境」「技術・戦術」の 12 カテゴリーを抽出した。

大学生の勝利志向性とスポーツ観との関連を考察した結果、以下のような男女差が認められた。①勝利志向性は、男子の方が女子よりも有意に高い得点を示した。②勝利志向性得点から「勝利志向群」「中間群」「レク志向群」の３群に分け、スポーツ価値意識との関連を検討した。その結果、女子の「中間群」では、「社会的有用性」因子得点が男子よりも有意に高かった。一方、「レク志向群」では、「社会的有用性」「日常的有用性」で男子が高い値を示した。

こうした結果は、日本の大学生の組織的スポーツ活動経験がスポーツに対する価値意識の獲得・形成に及ぼす影響を示したものである。小･中･高校段階でのスポーツ少年団、スポーツクラブ、運動部活動への参加率が低い、韓国、台湾との差異については、今後、精査していくことが課題として残されている。

３）途上国におけるスポーツ・リテラシー教育の制度設計関する基礎的研究

（１）運動会の学校行事化の試み

Education for all や貧困撲滅が国際的な課題とされる中、カンボジアでは国際機関や各国 NGO・個人による様々な教育支援活動が展開されている。カンボジアでは、2009 年にナショナル・カリキュラム上、体育授業は本格導入された。しかし、施設・用具の不足や教師の体育に関する専門性の不足などの理由から、現在に至っても教科における体育が実施されるまでには至っていない（Yamaguchi、2012）。そのような中、海野らは、2011 年以降、３度のカンボジア現地の視察調査を続けてきた。せめて、必要にして最低限度の学校体育をカンボジアの子どもたちに提供したいとの思いが本研究の動機となっている。そこで本研究では、我々がカンボジア北部チョンカル村において学校運動会を開催するに至る経緯および成果について研究報告し、途上国における学校体育の普及・振興に向けた支援方略の在り方について考察する。

学校運動会がカンボジアにおいて学校体育を振興していく上で可能性を秘めているものと考えている。その場合、特に重要なことは単発的な支援だけでなく、ボトムアップ式の継続的な支援である。こうした意図に基づいて、われわれは、2013 年以降、ウドンメンチェイ州内の３つの小学校、中学校１校にくわえ、州初等教員養成所（PTTC）で学校運動会を開催した。

本研究は、以下のような方略が途上国において学校体育の振興を進める上で有効であることを示唆している。第一の注目すべき方略は、カンボジアの子どもや教師に学校体育を浸透させる上で特定のエリア内で学校から学校へ支援を増殖させていくことである。第二に、対象地域の教員養成サイクル、たとえば、チョンカル村で運動会を体験した子どもが教員養成所を卒業して教員として U ターンすることを考慮した方略は、運動会の学校行事化を進めていく上での一助となることが推察される。

今後、活動成果の評価を高めていくためには、アセスメントシステムの構築が必要である。くわえて、質的データのみではなく、量的データも強化していくことが必要である。

（２）カンボジア農村部の子どもの実態調査

①跳、投、走などの基本動作では、日本の子どもの比べ、10 歳以降、加齢に伴う記録の向上が見られなかった。このことは、生活、遊びを通した学習場面における運動経験が影響を及ぼしているものと推察される。②カンボジア南部の子どもを対象とした先行研究と比較した結果、体格、体力、運動能力ともに低得点だったことから教育・体育の普及・振興の過程での格差を反映したものと推察される。

途上国における学校体育の普及・振興を図る際、こうした子ども、教師といった主体的条件にくわえ、教育行政上の条件、社会的および地理的条件を考慮することの必要性が示唆された。くわえて、現地の教育要求・必要を掘り起こしていくことの必要性も示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①口野隆史,幼児期に体験してほしい運動遊びや体育的活動,たのしい体育・スポーツ、査読無,34 巻第 5 号,18-21,2015.
②門田理代子,續木智彦,カンボジアの子どもたちの体力の現状と体育の課題,たのしい体育･スポーツ,査読無,34 巻第 5 号,26-29,2015.
③海野勇三,カンボジアにおける国際教育協力の試み：チョンカル村に根差す生活体育の展開,たのしい体育・スポーツ,査読無,34 巻第 1 号,54-59,2015.
④海野勇三, 子どもの学びの履歴から見えてきた体育授業の実態と教員養成段階の課題,体育科教育,査読無,第 62 巻第 7 号,16-21,2014.
⑤海野勇三,子どもたちは体育授業でどんな学びをしているか,学校教育,査読無,6 月号,6-13,2014.
⑥口野隆史,目の前の子どもの現実と保育者

の願いの狭間で,たのしい体育・スポーツ,査読無,33 巻第 1 号,70-71,2014.
⑦海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子・他 2 名,カンボジアにおける学校体育振興への国際協力,山口県体育学研究,査読有,第 56 巻,19-33,2013.
⑧黒川哲也,体育科における学びの実体と教師教育の課題,Synapse,査読無,26 巻,44-48,2013.
⑨鐘ヶ江淳一,子どもの健康な心と体を育むためのカリキュラムづくり,たのしい体育・スポーツ,査読無,32 巻第 9 号,40-41,2013.
⑩口野隆史,現在の幼児の運動発達の状況と課題,たのしい体育・スポーツ,査読無,32 巻第 1 号,70-71,2013.
⑪海野勇三,養成段階における体育教師教育カリキュラムの課題;『体育授業における学びの履歴』調査結果から考える,山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要,査読無,第 33 号,3-6,2012.

〔学会発表〕(計 16 件)
① KANEGAE Junichi, UNNO Yuzo, TSUZUKI Tomohiko, KADOTA Riyoko, KUROKAWA Tetsuya, KUCHINO Takashi, Exploring Possibilities Support Volunteer Activity for Developing Country to Teacher Education, The Fifth Pacific Rim Conference on Education, Nov.4-5, 2014, University of Taipei.
② TSUZUKI Tomohiko, UNNO Yuzo, KUROKAWA Tetsuya, KANEGAE Junichi, KUCHINO Takashi, KADOTA Riyoko, Analysis of Actual Condition of PE Class: In Case of Japan and Korea、 The Fifth Pacific Rim Conference on Education, Nov.4-5, 2014, University of Taipei.
③ KADOTA Riyoko, UNNO Yuzo, TSUZUKI Tomohiko, KANEGAE Junichi, KUROKAWA Tetsuya, KUCHINO Takashi, Examining Physical Proportion and Physical Fitness of the Children in Rural Districts of Cambodia, The Fifth Pacific Rim Conference on Education, Nov.4-5, 2014, University of Taipei.
④門田理代子,中島憲子,續木智彦,鐘ヶ江淳一,海野勇三,カンボジア農村部における子どもの体力特性,日本発育発達学会第 12 回大会,2014. 3. 大阪.
⑤ KANEGAE Junichi, UNNO Yuzo, NAKASHIMA Noriko, TUZUKI Tomohiko, International Cooperation in Education for Encouraging School PE in Cambodia (Case Study), 23rd PAN ASIAN SPORTS & PHYSICAL EDUCATIONCONFERENCE, August 8-11 2013, CEBU NORMAL UNIVERSITY.
⑥ UNNO Yuzo, NAKASHIMA Noriko, KANEGAE Junichi, TSUZUKI Tomohiko, Urgent Issues In Actual Conditions of PE Class And Curriculum In East Asia, The 23rd PAN ASIAN SPORTS & PHYSICAL EDUCATIONCONFERENCE, August 8-11 2013, CEBU NORMAL UNIVERSITY.
⑦ TSUZUKI Tomohiko, UNNO Yuzo, NAKASHIMA Noriko, KANEGAE Junichi, Analysis of "Correlation between Learning Product、 Learning Attitude and Teacher's Instruction" in PE class: In case of Japan and South, The 23rd PAN ASIAN SPORTS & PHYSICAL EDUCATIONCONFERENCE, August 8-11 2013, CEBU NORMAL UNIVERSITY.
⑧ NAKASHIMA Noriko,UNNO Yuzo, KANEGA Junichi, TSUZUKI Tomohiko, What's the Most Urgent Issue to be improved in PE Class and Curriculum? ; Through Comparative study in East Asia, the 23rd PAN ASIAN SPORTS & PHYSICAL EDUCATIONCONFERENCE, August 8-11 2013, CEBU NORMAL UNIVERSITY
⑨ UNNO Yuzo, NAKASHIMA Noriko, KANEGAE Junichi, TSUZUKI Tomohiko, KUROKAWA Tetsuya, Urgent Issues in PE Classes and Curriculum in East Asia, International Research Forum in Sports and Physical Education, August 13 2013, Philippine Normal University.
⑩UNNO Yuzo, Jun Koo Sohn & Young Mi Chung, TSUZUKI Tomohiko,NAKASHIMA Noriko, KANEGAE Junichi, KUROKAWA Tetsuya, Only Student Knows the Reality in PE Classes and can Tell That：Actual Conditions and Problems in Japan and South Korea, The 4th Pacific-RIM Conference on Education, October 22-23 2013, Gyongju Hilton Gyongju Republic of Korea.
⑪中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・續木智彦,女子児童・生徒の体育授業における学びの実態、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会（九州共立大学,9.13-15.2013）
⑫鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・續木智彦,女子児童・生徒からみた体育教師の指導性の内実、九州体育・スポーツ学会第 62 回大会（九州共立大学 9.13-15.2013）
⑬黒川哲也・鄭英美・海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一・續木智彦,今日の韓国における高校体育の実態;共同性に着目して,日本スポーツ教育学会第 33 回大会（日本大学,10.19-20.2013）
⑭中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・續木智彦・黒川哲也,体育における学びの履歴とジェンダー;学習への構えタイプへ着目して,日本スポーツ教育学会第 33 回大会（日本大学,10.19-20.2013）
⑮鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・續木智彦・黒川哲也,体育における学びの履歴とジェンダー；体育嫌いの児童・生徒に着目して,

日本スポーツ教育学会第 33 回大会（日本大学,10.19-20.2013）
⑯海野勇三・李勝雄,Urgent Issues in Actual Class in East Asia, 台湾運動休閒産業管理技術検討会議, Survey on Learning Career of School Children in Japan、 the 3rd East Asian International Conference on Teacher Education Reseach, （建国科技大学,4.27-28.2012）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
鐘ヶ江　淳一（KANEGAE Junichi）
近畿大学九州短期大学・保育科・教授
研究者番号：90185918

(2)研究分担者
中島　憲子（NAKASHIMA Noriko）
中村学園大学・教育学部・准教授
研究者番号：00301721

海野　勇三（UNNO Yuzo）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：30151955

口野　隆史（KUCHINO Takashi）
京都橘大学・文学部・教授
研究者番号：60192027

黒川　哲也(KUROKAWA Tetsuya)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：50390258

(3)連携研究者
續木智彦（TSUZUKI Tomohiko）
西南学院大学・人間科学部・講師
研究者番号：60468791

門田理代子(KADOTA Riyoko)
中村学園大学・教育学部・助手
研究者番号：40641866